

京都大学工学部地球工学科
京都大学大学院工学研究科
京都大学大学院工学研究科
京都大学大学院工学研究科

学生員 ○ 沢 一馬
正会員 山口 敬太
正会員 久保田 善明
正会員 川崎 雅史

1 はじめに

滋賀県内において琵琶湖や内湖に面した集落では水路が網のように張り巡らされ、人々の生活に密接に結びつき必要不可欠なものであった。しかし戦後、多くが埋め立てられ道路や宅地へと姿を変えた。そのような中、伊庭は現在も歴史的水路を残す数少ない水郷の一つである。伊庭の水路を対象とした既往研究には、機能とその変化を明らかにした研究¹⁾や明治の絵地図を用い土地の区画や利用方法を明らかにした研究²⁾があるが、変遷が十分に追えているとは言えない。現在、歴史的な水郷景観や水利用に関わる生活文化が注目されつつあり、伊庭の水路網と水利用の変遷を明らかにすることは残された水路の価値を評価する上で、また琵琶湖周辺での水郷景観や水文化を捉えていく上で必要であると考えらる。

そこで本研究では、伊庭において明治から現在までの社会基盤としての水路網と水利用の変遷を明らかにすることを目的とする。その上で、現在まで水路が残されてきた要因についての考察を行う。

2 各時代の水路網の復元

水路網の変遷を明らかにする為、行政文書を中心に史料調査を行った。史料は滋賀県政史料室、能登川博物館、伊庭町所蔵の絵地図、写真、文書を用いた。また補助的にインタビュー調査³⁾を用いた。史料とその概要を表1に記す。また、調査結果から伊庭の水路の変遷図(図1)を作成した。

3 水利用の変遷

1) 生活用水としての役割

水利用の様子を明らかにする為インタビュー調査³⁾を行った。得られた水利用の変遷を表2に示す。戦前には多くの家で、生活に井戸の水が用いられたが、井戸のない家を中心に川の水が炊事等に使われていた。

表 1：使用した史料とその概要

史料名	概要
「神崎郡第1区伊庭村」	明治前期作成の地籍図の地租改正地引絵図にあたり明治前期の水路網が読み取れる。
「能登川町管内図」	昭和37年測量、昭和42,46年修正の測量地図
「大字伊庭土地改良古今図」	昭和49年に測量された1/1000の地図で圃場整備の内容が書き込まれている。
航空写真	昭和21年米軍撮影の航空写真。戦後の水路の様子が読み取れる。
水路を撮影した写真	昭和55年中川氏撮影。100枚程度存在し昭和55年時点の様子が読み取れる。
「神崎郡伊庭村調査」	滋賀県河港課、大正12年、用恵水路の下付に伴い測量が行われ、水路の幅、長さが記載。
「溝渠廃止」	滋賀県土木課、昭和2年、官有溝渠を廃止し田畑・宅地化に関する情報が記載。
「農村総合整備モデル事業計画変更説明資料、能登川地区」	平成11年、計画変更の際の行政文書。整備内容や標準断面図が記載。

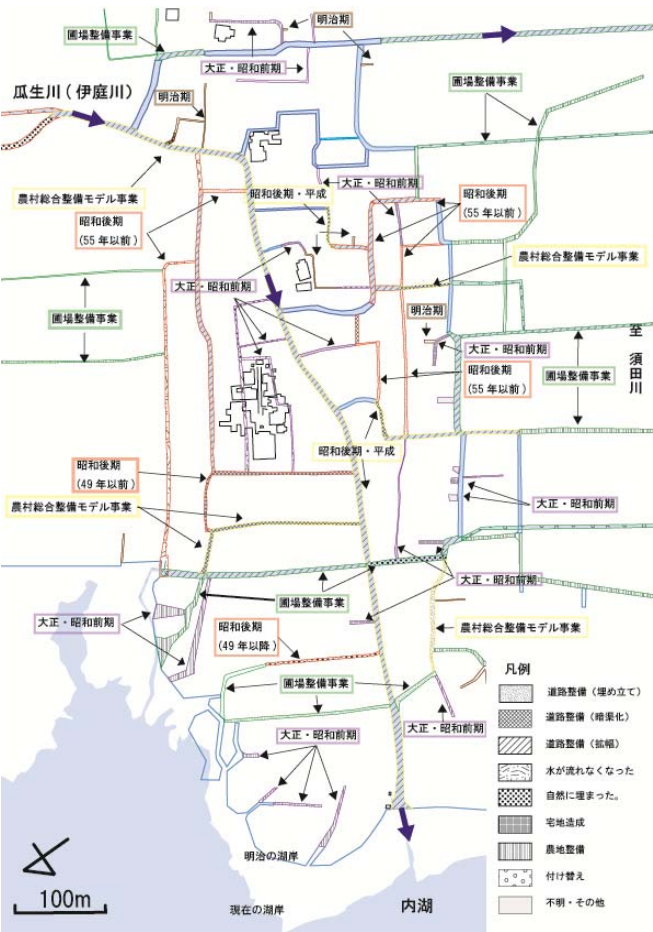


図 1：水路網の変遷

また多量の水が必要な風呂へは多くの家が川の水を使

用していたことが分かった。昭和 30 年代頃にポンプが普及し風呂への利用が減った。しかし、伊庭の井戸は金気が強く衣類が黄色くなる。そのため昭和 50 年頃まで洗濯物のすすぎに川の水が使われたが、昭和 54 年に上水道が普及すると使用されなくなった。その後は汚れ落とし等の雑用がされる程度である。平成 15-20 年に下水道が整備されるまでは水路は排水路としての役割を持っていた。しかし現在は水質の向上、残った水路をアメニティの向上に役立てようとする動きが高まりつつある。

表 2：水利用の変遷

時代		S20年以前	S20代	S30代	S40代	S50代	S60代	平成
生活用水	飲用	○	○	○	×	×	×	×
	炊事	●	○	○	×	×	×	×
	風呂用	●	●	●	○	×	×	×
	洗濯物のすすぎ	●	●	●	●	●	×	×
	雑用	●	●	●	●	●	●	●
農業用水		●	●	●	○	○	×	×
交通路		●	●	●	○	○	×	×
保全運動の動き		×	×	×	×	○	○	●

凡例 ●明確に確認できた。○一部で確認できた。×確認できない。

2) 農業用水としての役割

伊庭の集落を取り囲むように広がった田畑に水を導水する必要があり、集落内の水路は導水路としても重要な役割を担っていた。堰などにより水がコントロールされ高次利用されていた。しかし、昭和 55 年から実施された圃場整備によって田畑の整形化や用排水分離が行われ、農業用水は伊庭内湖からポンプによって供給されるようになった。

3) 交通路としての水路網

明治初期には戸数 496 軒に対して舟の数 482 艘⁴⁾と計上されている。ヒアリング調査では、昭和初期において舟を所有したのは百姓と漁師で商家の多くは所有していなかったことが確認できた。また 2 艘以上所有する家も見られた。その後、昭和 30 年頃にそれまでは盛んに使われていた田舟がリアカー、軽トラに変化することで水路の交通路としての役割は失われたことが確認できた。

4 考察：水路の埋立と狭隘化の要因

伊庭では大正 14 年に官有溝渠の廃止によって多くの水路が田畑、宅地等へと変更されたことが行政文書「溝渠廃止」⁵⁾から確認できた。村から用をなさなくなった水路を変更したいとの申請が出され、県が許可している。該当の溝渠には袋小路状の水路が当てはまる。水が澱み生活用水としての利用は考えづらく田舟

の利用がなくなった時点で不要になったと推察される。また昭和 21 年米軍撮影の航空写真では既に道路と変化した水路も確認できる。昭和 11 年には隣村への農道の道路認定と拡幅を申請した行政文書が残り「近時交通頻繁ニ伴ヒ」⁶⁾とある。昭和前期には道路交通が増加しており道路整備の必要があったと言える。

戦後から昭和 55 年までには主に集落内の東西方向に流れる水路が整備された。インタビュー調査で田舟の通行路として機能していたものも存在することが確認できた。しかし、これらの田畑への導水路としての役割は、ネットワーク上、他の水路で代替可能と推測できる。そのため田舟が利用されなくなった時点で役割が薄れ、道路が整備されたと考えられる。

昭和 55 年起工の圃場整備によって集落周辺の水路は付け替えや、道路や耕作地に変更された。また、集落内を貫くように流れていた瓜生川が付け替えられ上流で集落を通らず直接内湖に流れ込むようになり治水面は向上した。また昭和 58 年からの農村総合整備モデル事業を中心に集落内の道路の整備が行われ、そのため多くの水路が埋め立て、暗渠化、縮小などによって姿を消した。洪水時の排水上、埋め立てることが不可能であった水路も道路用地として使用できるようになった為であると考えられる。

5 まとめ

本研究では、伊庭における水利用と水路網構造の変遷を明らかにした。伊庭においては上水用、交通用、農業用、排水用の順に水路の役割が減少した。田舟が使われなくなった昭和 30 年代以降、多くの水路が埋め立てられ、昭和 50 年代に圃場整備で農業用水としての役割が、瓜生川の付け替えで治水面の問題がなくなると、道路整備が一気に進んだ。逆に言えば、伊庭の水路は、戦後も各時代において農業用水や治水面などの役割を担っており、それらの役割が失われない範囲で整備が進められており、また、水路の一部が残されてきたといえる。

注、参考文献

- 1) 市川秀之：「湖東地域における集落内水路の機能とその変化」，人間文化 27，p. 2-15，2010
- 2) 「能登川の歴史」編集委員会：「明治の古地図」，2002
- 3) インタビュー調査：1, 2 を併用した。1. 集団で談話を行い共有の情報を抽出した。各 6~7 人を対象とし 2010 年 12 月に計 4 回実施した。2. 質問項目を設置し統計的に行った。自治会の組織数 34 組から各 1 軒を対象とし調査を行い 31 軒の回答を得た。2011 年 1 月に実施した。
- 4) 滋賀県：「滋賀県物産誌」，1880
- 5) 滋賀県土木課：「溝渠廃止」『起工規則処分』，1927
- 6) 滋賀県土木課：「渡瀬線」『市道町村道』，1936-37